

第一次と第二次の実験を終えた私は、昭和33年四月、同じ新宿区内にある四谷第七小学校に転勤しました。淀橋第一小学校で、終始変らない援助と激励を続けてくださった山下校長の勇退を機会に、条件の大いに異なった学校で実験を続ける必要を感じたからです。こういう実験を試みるためには、公立・私立を問わず、校長の理解と協力が絶対に必要で、それがなくては行くことができません。何にしても文部省の方針に背いたやり方で、しかも海の物とも山の物ともつかぬことをやっていくのですから、まず、子供の父母たちが不安に思うのは当然です。子供の一生の問題ですから、私が独りでいくら力んでみた所で、それで不安が消えるというものではありません。山下校長自ら、私の組の保護者を集めて、私の経歴、手腕を誇張して、「絶対に心配のないこと」「安心して任せられること」をくり返し、くり返し説いてくれたものです。また、成績が上れば上ったで、他の面から、陰口が校長の所へ行きます。「学級差がついたらどうするか」「学年主任として責任をどう感ずるか」という詰問が、他の組の保護者から私に直接あったくらいですから、校長へはどのくらい、いやみが行ったことでしょう。校長としては、全校が同じように教育指導が進められて行く時に

最も平和があるので、私のように、最初から凸凹を作るのを目的でいる者は、さぞ迷惑だったと思いますが、少しもいやな顔をしないばかりか、私が父兄の批評など気にしたりすると、「非難はどんなにしていたって出るよ。そんなことを一々気にしていたら息だってつけなくなるよ」とこともなげに打ち消して、励ましてくれたものです。こういう暖かい校長の保護がなかったら、私の実験も途中で放棄していたかも知れません。二回の実験で、「結論を得た」とは思いましたが、今までの五年間で、「量り知れない将来を持った、無邪気な子供たち」にすっかり魂を奪われてしまった私は、小学校を出る気持をすっかり失ってしまっていました。それで、学校の規模・環境・保護者層の大いに異なった学校で、この実験を続けてみたいと思って、いろいろと当たってみたのですが、なかなか山下校長のような大きな度量を持った校長というものは少ないものです。

幸い、四谷第七小学校が、淀一校とあらゆる点で対照的な条件を持っており、しかも三浦校長が広量の人でしたので、ここで勤めることになったのです。

第三次の実験は、昭和35年四月から始まりました。すでに、二回

にわたる実験の整理もつき、今度は、はっきりとした計画の下に、自信を持って行うことができたわけです。しかも、二組の菊池安子先生が、まったく同じやり方をしてくださることになりましたので、前途は非常に明るいものになりました。

学校および子供たち

電車通りをはさんで、二百メートルほど距てて、新宿御苑と向い合っているとは言え、子供たちの住む家は、窮屈にごたごたと軒を並べており、繁華な商店に囲まれています。学習環境はお世辞にも良いとは言えません。運動場も、新宿一を誇る淀一校に比べると四分の一ほどしかありません。児童数は、淀一校が、一学級五十数人で、一学年、四学級編成だったのに対して、ここは二学級編成で、一学級三、四十名です。家庭は、淀一小が、半数以上がサラリーマンであったのに対して、ここは過半数は商店の子供たちで、母親たちは、子供の教育を気にしつつも、手がかけられないのが実情です。保護者の学歴も、淀一校が旧制中・高女を最低にして、高専・大学卒が三分の一ほどありましたのに対して、ここは高小・中学がほとんどで、高専・大学卒は極めて稀です。

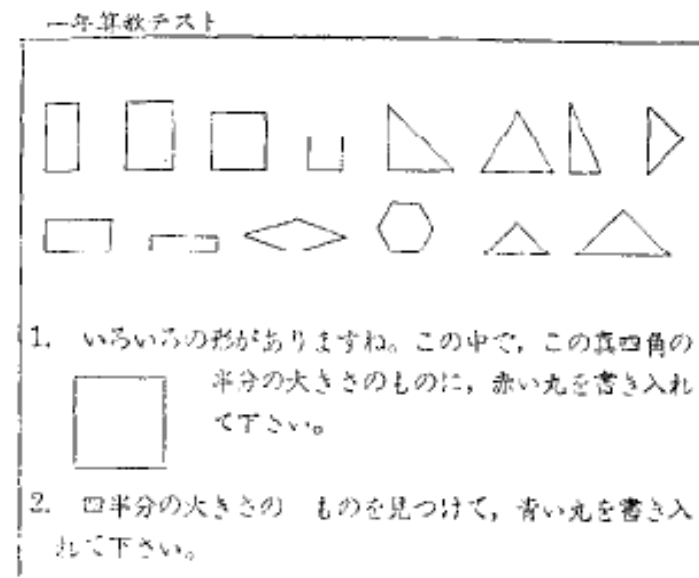
さて、私の指導する一年生は、昭和39年四月入学の34人、男17人、女17人です。四月の入学に先立ち、二月に、入学予定者の身体検査と共に、簡単な知能検査を実施し、それに基づいて、一年生68人を、能力的に二組に均分し、担任を、私と菊池光生でくじ引き決めました。

指 導

すでに二回の実験をして、第一章に述べた「基本原則」ができていたもので、今度は、第一次の実験の更に徹底した実験が行えたわけです。

教科書は、

第1章の第2節で述べましたように、当用漢字で表記できる言葉は、一つの例外も許さずに、こ



れを漢字に改めることにしました。ちょうど原文のかなが隠れるような大きさに、そのかなに当る漢字を手刷りの印刷機で印刷し、これを与えて子供たちにはらせました。この文の漢字は、原文のかなの上からはられたものなのです。この漢字の印刷はなかなか骨の折れる仕事で、時間のかかるものです。

一年四月の算数テスト

● 一番大きい○はどれか。下の正しい答に○をつけ、正しくない答に×をつけなさい。

左から二番目の○
右から三番目の○
左から三番目の○
右から二番目の○

● 一番小さい○はどこにあるか。

左から二番目
右から二番目
左から三番目
右から二番目

プリントによる学習は、学習した漢字に習熟させるねらいを持っているものですから、できるかぎり、ひまを見て、良い教材を作り、それをプリントして与えました。

第1章、第2節に挙げました物語、なぞなぞは大変子供たちが喜んで読みますので、学習した漢字がどんどん習得されて行きました。学校や学級のニュース・家庭通信等を載せた「学校新聞」や「一年生新聞」も、学級と家庭を結びつける以外に、漢字習得にも大変役立ったと思います。

理科教材

雪 と 氷

一、雪や氷はどけると何になりますか。

二、水はうんと冷くなると、氷ります。

三、冬の寒い朝には、水たまりの水が凍って、つるつる滑ります。アオルが凍って、板のように固くなる場合があります。水道の水が凍って、出なくなることがあります。でも、お昼近くになって暖くなると、氷はどけて元の通りになります。夏の暑い時に氷ができたらいいですね。

四、雪は、雨が空の高い所で凍った物です。雪が空から降って来るのを、下から見上げると、黒く見えます。けれども、降ったのを見ると、真白です。雪が降ると、寒いですね。雪投げをしたり、雪ダルマを作って遊びます。

雪もお日様に当たると、溶けて水になります。

五、寒い朝には、屋根などが真白に見えることがあります。それは霜です。霜は雪や氷の仲間です。どけるとやはり水になります。霜は、寒くても、風の強い朝は見られません。霜は、空から降って来るものではなく、しめった空気から生れるのです。

仲間

同

当る

投げる

降る

暑暖寒固

板

熱冷

いいいい

板

熱冷

いいいい

理科教材

<p>風と風車</p> <p>私たちの回りには目に見えないが、空気というものがあります。風は空気の動いたものです。空気が速く動くと、強い風になり、遅く動くと、弱い風になります。強い風は、大きな力を出します。風車は風の方で回す車のことです。</p> <p>風車でお米をついたり、粉を作ったりします。</p> <p>私たちは紙でおもちゃの風車を作り、回して遊びましょう。</p> <p>暖かい風が吹くようになると、どこからともなくたくさんのお虫が出て来ます。それで昔の人は風が虫を運んで来るのだと思っていました。</p>	<p>風車 風車</p> <p>回り 回(く)る</p> <p>速く 速い</p> <p>遅く 遅い</p> <p>力 力</p> <p>粉 粉</p> <p>紙 紙</p> <p>遊び 遊び</p>
--	--

社会科教材

<p>時の記念日</p> <p>六月十日は時の記念日です。むかし天智天皇が水時計を作って時間を計り、人人に時刻を知らせ始めたのがこの日だそうです。時計は時を計るという字でできています。時計には、お日さまの影で計る日時計、砂で計る砂時計、振子で動く振り時計があります。むかしはふつうの人は時計がなかったので、お日さまの動きで時を計りました。</p> <p>お日さまの出る時を「あけ六つ」、お日さまの入る時を「くれ六つ」と言ってお寺で鐘を六つつきました。人人はこの鐘を聞いて起きて働き始め、また仕事を覚えて家に帰りました。</p>	<p>砂 少い</p> <p>石 重い</p> <p>振り 力</p> <p>時 日</p> <p>時刻 時間</p> <p>鐘 金</p>
---	--

社会科教材

お正月

私はまだ暗いうちに起きて、皆でお雑煮を祝いました。おかあさんが「おめでどうございませう。」と言いました。私も言いました。弟の強も言いました。おとうさんは、「みんなおめでどう。」と言っておとそを回しました。私は舌でちよつとなめて弟に回しました。

お宮へお参りに行きました。おとうさんは手をたたきました。ばんばんとよい音がしました。私も手をたたきました。私のほばしゃばしゃでした。日の出を待っておがみました。赤い大きなお日様でした。お宮参りは寒いけれどとてもよい気持ちだと思いました。

帰りに私の組の花子さんや道子さんに会いました。私たちは「おめでどう。」と言いました。朝男くんや道くんたちが遊びに来ました。皆でカルタ取りをしました。おとうさんが読んでくれました。朝男くんは「へ」と「く」を間違えて取りました。私は「い」と「こ」を間違えました。弟の強は、初めから「つ」を持って難しませんでした。

(暗明)

お使

「竹男さん、内屋さんへ行行って来てね。」と、台所からお母さんが言いました。竹男さんは「はい」と返事をしました。けれども、本から目を離しません。

「鳥のひき肉を五十円買って来て頂戴。」

竹男さんはやんと立ち上りました。そして、お母さんから渡された百円札をポケットに入れると、買物袋を持って急いで出かけて行きました。米屋さんの前で進さんに呼び止められました。「竹男さん、どこへ行くの。」「内屋さんへお使いに。」「何だ、お使いか。走っているから、僕はどうかと思ったよ。」「だって早く帰って、読みかけの本の続きを読みたいんだもの。さようなら。」竹男さんはまた駆け出して行きました。

内屋の店先にはハムやソーセイジや卵が並んでいました。「おじさん、五十円下さい。」「竹男さんは元気に言いました。

「はい、はい。五十円、何を上げましょうか。」

「ええと、何を買うんだっけ。ええと、牛肉ではないし、ハムだったかな。何だっただかあ。」いくら考えても思い出せません。竹男さんはきまりが悪くなりました。

「家へ帰ってもう一度聞いて来ます。」竹男さんはあわてて家へ駆けもどりました。

(日本書籍小学国語二年後期用教科書より)

肉 肉

父母の会

顔・頭・頭

入れる↓出す

持・時・待

止める↓止る

止

読

読

卵 卵

並 並

牛 牛

牛 牛

原文では漢字は
・的だけ
(新出↓米・読)

道徳教材

黒い(こくろ)入

「ぼくの方が黒いよ。」

「いや、ぼくの方が黒いよ。」

春男さんと秋男くんが言い合いを
しています。みんな集って来まし
た。

春男くんが、うでを見せました。

秋男くんもうでを見せました。二

人とも同じくらい黒かったです。

そこへ、石井先生が来ました。

「顔やうでの黒さは同じだが、春

男くんの方が鼻のよなが黒いし、

秋男くんの方が爪の中が黒いよ。」

ど先生がおっしゃいました。みんな

「あはははは。」と笑いました。

二人の黒い顔が、赤くなりました。

た。

集らない
りました

黒い

黒い

黒い

黒い

黒い

黒い

黒い

黒い

黒い

黒い

黒い

黒い

黒い

黒い

セ タ

このうはセタでした。わたしは色
紙で、切り紙や、折り紙や、たん
どくをたくさん作って、竹に下げ
ました。

折り紙は舟を作りました。切り紙

はちょうちんを作りました。金色

の色紙で、お月様やお星様も作り

ました。色紙を切って作ったたん

どくには、石井先生に教えて頂い

た「天の川」「セタ」「元気を予

供」「お星様」などの字を書きま

した。

夕方から、天気が悪くなって、雨

が降り出しましたので、お飾りを

家の中に入れました。

打 打

打 打

打 打

打 打

打 打

打 打

打 打

打 打

打 打

打 打

打 打

打 打

打 打

打 打

百 百

百 百

百 百

百 百

ないのです。

また、理科で学習する「大根」「球根」「れんげ草」「ほうれん草」なども、漢字を使用することにより、前二者は植物の根であることが、後者の「そう」という言葉は「草」であることがわかり、言葉の認識が深まります。「大根」の「大」は「大すき、大きらい、大サーカス」の「大」で「大きい」という意味だな、「球根」の「球」は「野球・電球・地球」の「球」で「たま」のことだなと、他の言葉との関巡りが明瞭になって、概念が正確になります。

結 果

第三次の実験はまだ始まったばかりで、現在進行中です。昨、昭和35年4月5日、入学式で学年は始まりましたが、あいにく私がひどい感冒にかかりまして、子供たちに接することのできたのは、同月11日でした。それから、7月20日まで、丸三か月と十日間の間に、およそ二百の漢字を提出しました。この二百字という数の漢字は、文部省の漢字配当表によれば、第三学年の第一学期終了時までには提出される漢字の総数に当たります。つまり、私は、一年生の最初の一季期間に、一般に通算七学期間に学習する漢字と同じ量の漢字を学習させ

たわけです。数だけと比較すれば、ずいぶん無理な学習をさせたものだと思われやすいですが、実はこれが、楽しい、のびのびとした学習であったことは、第1章の第1節、第2節をすでにお読み下さった皆さんには、よく理解していただけたと思います。

調査は二回行いました。

(1) 第一回「読みの調査」について

第一回の調査は入学後、ちょうど二か月たった6月10、11日の両日にわたって行いました。

<表2>は、特定の子供について、その読める「漢字」「かな」の全部を挙げたものです。男子甲は、私の学級で最も学習能力の低い子で、乙はそれに次ぐ子です。女子丙は、女子で二番目に低いと思われる子で、「かな」と「漢字」の、習得状況に著しい差が見えたので、特にここに引用しました。

<表1>

18.	99字	1.	134字
19.	96	2.	124
20.	92	3.	121
21.	87	4.	119
22.	82	4.	119
22.	82	6.	115
24.	81	7.	114
25.	79	7.	114
25.	79	9.	113
27.	75	10.	111
27.	75	11.	110
29.	74	12.	107
30.	67	13.	105
31.	60	14.	104
32.	59	15.	103
33.	46	16.	101
34.	28	17.	100

提出漢字 139字

甲は、ひらがな一字も読めませんでした。「ひらがな書き」された自分の名を見ると、「これは、僕の名だ」と言いますが、その中のどの一字を取り出して、尋ねても、「わからない」と言います。驚いたことには、漢数字の「一」「二」「三」が読めませんでした。「七」や「八」のむずかしいことは、今までの実験でわかっていましたが「一、二、三」は、文字がそのまま内容を示しているの、これは最もやさしい漢字の一つであると思っていました。ところが、甲には読めないのです。この子については、その後、手を取っ

		女子丙				男子乙			男子甲		
刀	聞	草	白	小	さ	歩	目	す	車	口	1
雷	電	元	雨	下	け	少	赤	も	鳥	木	2
鳥	絵	気	中	手	る	門	火	き	糸	小	3
	答	鳥	青	上	あ	糸	川	の	雲	山	4
	道	少	子	山	い	紙	土	一	牛	田	5
	顔	多	耳	日	は	黒	水	二	畑	森	6
	頭	糸	金	田	し	雲	雨	三	力	大	7
	首	紙	石	森	ら	書	青	五	聞	月	8
	毛	黒	女	大	み	電	耳	十	雪	赤	9
	爛	前	木	月	一	谷	石	口	雷	川	10
	牛	雲	右	花	二	道	右	木	鳥	上	11
	風	黄	足	目	三	畑	足	小		水	12
	力	回	左	赤	四	牛	左	手		白	13
	歌	太	虫	火	十	組	虫	山		雨	14
	色	高	車	川	口	雪	車	大		耳	15
	雪	長	早	土	木	鳥	鳥	月		木	16
	番	書	天	水	八		男	花		右	17

△表2▽

て「一」「二」「三」をくり返しくり返し指導しました。「三」を書く時には、「さあ、今度は、一、二、三の『三』だよ。そら、ひとつ、ふた一つ、みっつ」と言いながら、甲の手を取って、画と言葉とを合せながら、字画と内容と関連させながら、何回指導してやったことでしょうか。書き終わると、「さあ、これは何という字だっけな」と質問し、念を押したのですが、八月一日の第二回のテストでも、「一」と「二」だけは読めましたが、「三」を見た時、首をかしげて「わからない」と言われた時には、さすがに私もがっかりしてしまいました。ひらがなは第二回のテストでも、ついに一文字も読めませんでした。しかし、甲の読んだ漢字を御覧下さい。「鳥」と「鳥」の区別もつくのです。「雪」と「雷」の区別もつくのです。三学期になって、「掃く」という字のついでに、当用漢字にはない「箒」という字を、指導したことがありました。「掃く」という字を印象づけるために教えたわけです。指導後、一週間くらいたって、「箒」を黒板に書いて、「これ、何て言う字だったかな」と、こんな字は覚えてくれなくても良いのだが、と内心思いながら質問してみました。すると、多くの子にまじって、甲が元気良く手を上げるのではありませんか。私はすぐ甲を指名しました。すると、甲は立って、元気良く「ホーキ」と読みまし

た。これには、別の意味でまた驚かされました。乙は、明瞭に甲よりは能力が高いのですが、やはり、一般の学習について行く能力に欠ける子です。「ひらがな」の四字は、すべて、この子の名前に使われているものです。この子の名前には、六つのかなが使われますが、そのうちの四つは、一つ一つに分けても読めるわけです。乙の読める漢字は、四十六字もあります。

丙は、甲、乙に比べると、ずっと能力が高いことが明瞭ですが、学級における学習は、困難を感じず五人のうち一人です。読めた「ひらがな」は、九字ですが、そのうち五字が、この子の名前に使われるもので、名前に使われないのは四字というわけです。この子は、保育園を出ている子ですから、自分の名は、一年間、読んだり、書いたりしていたわけで、従って、九字のうちの五字は、小学校に入ってから学習したものではありません。すでに習得していたものです。だから、この子は、ひらがな四字を覚える間に、漢字は七十九字も習得したことになります。これなどは、どんなに、漢字の読みの習得がやさしいかを、よく物語っていると思います。

(2) 第二回「読みの調査」について

第二回の調査は、夏休みに入り、その登校日である8日2日に行いました。この一学期間に、おおよそ二百字の漢字を提出指導したことは前述の通りですが、この調査には、第一回の調査の時に提出した、百三十九字の漢字をそのまま提出しました。なぜそうしたかと言いますと、第一回の時の調査用紙をそのまま使ったわけです。新しく印刷する手間を惜しんだのと、学習したての漢字は避けた方が良いと思ったのとで、そうしたわけです。

<表3>は、提出漢字百三十九字について、全員の読めた漢字数を列挙したものです。全部読めた子が三人もいました。70パーセント以上の子が百字以上の漢字を読んでいます。33字は甲で、第一回の調査から五字ふえました。65字は乙ですから、これは19字もふえました。

学級平均は、120字強です。提出総数139字の80パーセント以上に当ります。習得字数、習得率、あらゆる点で、第一次よりずっと好成績であることは明瞭です。

調査その後

第三次である今回は、今までの反省の上に行われているだけに、

調査の結果が示す通り、極めて順調に授業が進められています。しかし、指導のための準備が忙しく、これは省くことはできませんので、調査はつい怠ってしまいます。第二回調査以後、現在に至る間まで、ついやっておりません。

一年を終る頃はぜひ調査をしたいと思っておりましたが、それもできませんでした。漢字を何字提出したかも数えておりません。教科書およびその他の教材を調べてみれば、すぐわかることですが、それさえもしておらないのです。よく人に尋ねられるのですが、ざっと四、五百字に達しているのではないかと考えられますが、あるいはもっと少ないかも知れません。

しかし、問題は、漢字がいくつ読めたから良い、というものではないということです。私の提案する学習法によれば、漢字は今までと比較にならぬほど、数多く習得できます。しかし、読める漢字がただ数多いただけでは、大した意味はありません。私が声を大きくして、この私の学習法を奨めるのは、それによって、子供の思考力が発達し、考え方が精密になることです。第二には、他教科の学習が大いに進むことです。

今、私の指導する子供たちは、二年に進んだばかりです。まだまだこれからです。これから何年かたって、この子供たちについてりっぱな成果が発表できるよう、がんばって行くつもりです。